

(報告)「高等学校の生物教育における重要用語の選定について」

1 現状及び問題点

高等学校の生物教育で使用される用語については、従前より語数の多さと不統一が指摘され、1998年に日本動物学会と日本植物学会によって「生物教育用語集」が編纂されたが、それからまた約20年が経過した。生物科学、生命科学がさらに格段の進歩を遂げた結果、高等学校の生物教育で扱われる用語が膨大になり、現行の教科書「生物」では、延べ2,000を超える数の用語が重要と指定されるに至っている。このことは、学習上の障害となっているばかりでなく、生物学が暗記を求める学問であるという誤解を生んでおり、大学の入学者選抜試験における受験科目の選択においても敬遠されるなど、高大接続のあり方にも深刻な影響を及ぼしている。折しも、学習指導要領が新たな改訂の時期を迎えており、ここでも、高等学校生物の用語の多さが指摘され、改善が求められる見込みである。今こそ速やかに、生物学が、知識ではなく思考で取り組むべき学問であるという認識を取り戻す必要がある。

2 報告の内容

生物科学分野教育用語検討小委員会は、現行の高等学校生物の教科書の調査と、インターネットを駆使した頻度分析、そして生物教育用語集の理念を踏襲した作業を行って、最重要語254語、重要語258語、併せて512語を、高等学校の生物教育で学習すべき用語として選定した。今後の高等学校生物教育における用語使用の指針とした。

選定に当たっては、学習すべき主要な概念とのつながりを重視し、用語の変遷があったものについては、原則として学界での一定の定着があったものを採用することにした。国際的に確立している用語を優先するため、可能な限り英語との一対一対応を取り、英語での使用頻度を重視した。また、この機会に複数の同義語の統一や、混乱のみられる用語の呼び換えも提案している。

本報告は、重要語リストに選定しなかった用語を、教科書で使わないとか、高等学校の生物教育の現場で教えないことを求めるものでは決してない。重要語として教科書中ゴシックで扱われる語を減らそうというのが小委員会としての提案である。最も重要なねらいは、生物学が暗記科目ではなく、思考力を大きく刺激する魅力にあふれた学問であるというメッセージを送ることにある。

なお、今回の報告は、用語の固定化を目指すものではなく、学問の進展と研究者・教育者からのフィードバックをもとに、継続的に改訂されていくべきものであると考えている。